

# Ānandagarbhaの曼荼羅成就法論

杉木 恒彦

## I. はじめに

チベットの諸学匠に高く評価され、瑜伽タントラ階梯の著作を多数残しているĀnandagarbhaの思想に関する総括的な研究は未だ初期の段階にあると言わざるを得ない。彼自身の手によって彼の思想全体が体系的によくまとめられた著作が特に残されていないことや、また瑜伽タントラ研究一般が主に正典たる地位を持つタントラ (*tantra*) の研究に関心を寄せ、(タントラに関する解釈者たちの様々な解釈がまさしく瑜伽タントラ密教に彩りを与えていたにもかかわらず) タントラの解釈者の著作は二次的なものと考えて、彼らの独自の思想体系の方を体系的に追求する気風が比較的薄かったことが、Ānandagarbhaの思想を体系的に深く研究することがほとんどなされなかつた理由であるように思われる<sup>1)</sup>。

Ānandagarbhaの著作群は、タントラの注釈と儀軌の二類型に大きく分けることができる。本稿では特に儀軌中の曼荼羅成就法に着目して、彼の特徴的な解釈学である「三三摩地 (*trisamādhi, tiñ ñe ḥdsin gsum po*)」を含む曼荼羅成就法儀軌論を、それら成就法が依拠するタントラについての彼の注釈書の記述も参照しつつ本質論的に明らかにし、ひいては彼の密教思想、更には瑜伽タントラの思想解明の一契機としたい。成就法儀軌論に着目する理由は、それが密教にとって重要な要素である「成就」達成の方法論であり、「成就」の問題とも関って彼らの生涯の実践生活のあり方とも大きく関わっている問題だと思われるからである。

Ānandagarbhaに帰される儀軌の中で「三三摩地」を含む曼荼羅成就法儀軌を説く儀軌書としては、

- (1) *Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikāsarvavajrodaya*
- (2) *Śrītrailokyavijayamaṇḍalopāyikāryatattvasaṃgrahatantroddhṛtā*
- (3) *Prajñāpāramitāmaṇḍalopāyikā*
- (4) *Śrīsarvadurgatipariśodhanamaṇḍalopāyikākṛpāvali*
- (5) *Sarvadurgatipariśodhanamaṇḍalavidhi*
- (6) *Sarvadurgatipariśodhanamahāmaṇḍalasādhanopāyikā*

の6本がある。まず初めに以下、本稿の曼荼羅成就法儀軌論の分析の便宜としてĀnandagarbha儀軌群の全体的内容を把握するために、また更には今後のĀnandagarbha研究の便宜のためにも、上記各々の成就法儀軌の構成の比較表を記す。より詳細な比較は表中各項目の注記を参照して頂きたい<sup>2)</sup>。なお、(1)は金剛界大曼荼羅、(2)は降三世大曼荼羅、(3)は般若波羅蜜多曼荼羅、(4)(6)は普明曼荼羅、(5)は九仏頂曼荼羅を説く。以下、本稿ではこの通し番号を用いて議論を進めることにする。

(1) <sup>3)</sup>	(2) <sup>18)</sup>	(3) <sup>19)</sup>
<p>初瑜伽三摩地<sup>4)</sup> 護輪<sup>5)</sup></p> <p>化作曼荼羅<sup>6)</sup> 総礼・四礼 懺悔・隨喜・勸請 二十種供養 (十九種)<sup>7)</sup> 廻向 菩提心戒<sup>8)</sup></p> <p>加持護念 摧罪 薩埵加持 四印, 等<sup>9)</sup> 灌頂<sup>10)</sup> 金剛禁戒 供養<sup>11)</sup>, *<sup>12)</sup></p> <p>器界觀 五相成身觀・加持現証 灌頂 (宝冠・繪綵) 四如来の会坐</p>	<p>初瑜伽三摩地 護輪</p> <p>化作曼荼羅 四礼 懺悔・隨喜・勸請 二十種供養 (十八種) 廻向 菩提心戒</p> <p>加持護念 摧罪 薩埵加持 四印, 等 灌頂 金剛禁戒 供養, * 入法界觀 器界觀 五相成身觀・加持現証 灌頂 (宝冠) 四如来の会坐 金剛薩 の出生</p>	<p>最勝瑜伽三摩地 護輪</p> <p>化作曼荼羅 礼 懺悔・隨喜・勸請 二十種供養 廻向 菩提心戒</p> <p>加持護念 摧罪 薩埵加持</p> <p>器界觀 般若波羅蜜多の觀想</p>
<p>曼荼羅王最勝三摩地<sup>13)</sup></p> <p>金剛界大曼荼羅の觀想</p>	<p>曼荼羅王最勝三摩地</p> <p>降三世大曼荼羅の觀想</p>	<p>曼荼羅王最勝三摩地</p> <p>般若波羅蜜多の 曼荼羅<sup>20)</sup>の觀想</p>
<p>羯磨王最勝三摩地<sup>14)</sup> 加持曼荼羅 (智薩埵遍入) 灌頂, 四摂, 四印, 功德事業<sup>15)</sup></p>	<p>羯磨王最勝三摩地 加持曼荼羅 (智薩埵遍入) 灌頂, 四摂, 四印</p>	<p>羯磨王最勝三摩地 加持曼荼羅 (智薩埵遍入)</p>
<p>&lt;供養親近次第&gt; 集会・開門 百八讚 四印 灌頂 供養<sup>16)</sup> 入法界觀<sup>17)</sup> 撥遣</p>	<p>&lt;供養親近次第&gt; 集会</p> <p>四印 灌頂 供養 入法界觀 撥遣</p>	<p>&lt;供養親近次第&gt; 集会</p> <p>四印</p> <p>供養, 等 入法界觀 撥遣</p>

(1)(2)は印・マントラ・曼荼羅から見て *Sarvatathāgatattvasaṃgrahanāmamahāyānasūtra* (以下ST)系の儀軌である。(3)の曼荼羅はSTのものではないが、曼荼羅以外はSTの觀想の諸要素を多く採用している。詳しくは表中各注記を参照。

(4) <sup>21)</sup>	(5) <sup>22)</sup>	(6) <sup>23)</sup>
<p>初瑜伽三摩地 護輪</p> <p>化作曼荼羅 総礼・四礼 懺悔・隨喜・勸請 二十種供養, 等 廻向 菩提心戒</p> <p>加持護念 摧罪 薩埵加持 四印, 等 灌頂</p> <p>器界觀 五相成身觀・加持現証</p> <p>四如來の会坐</p>	<p>初瑜伽三摩地 護輪</p> <p>化作虚空曼荼羅</p> <p>懺悔</p> <p>廻向 菩提心戒 供養・讚<sup>24)</sup> 遍入曼荼羅<sup>25)</sup></p> <p>五相成身觀・光明諸事業<sup>26)</sup></p> <p>讚</p>	<p>初瑜伽三摩地 護輪 授金剛杵・鈴 化作虚空曼荼羅</p> <p>懺悔・隨喜・勸請</p> <p>廻向 菩提心戒 供養・讚 遍入曼荼羅</p> <p>五相成身觀・光明諸事業</p> <p>讚</p>
<p>曼荼羅王最勝三摩地</p> <p>普明曼荼羅の觀想 供養 灌頂 金剛禁戒 四印 百八讚, 等</p>	<p>曼荼羅王最勝三摩地 器界觀 九仏頂曼荼羅の觀想</p>	<p>曼荼羅王最勝三摩地 器界觀 普明曼荼羅の觀想</p>
<p>羯磨王最勝三摩地 加持曼荼羅, 功德事業 (光明諸事業)</p>	<p>羯磨王最勝三摩地 加持曼荼羅・四印 (光明諸事業)</p>	<p>羯磨王最勝三摩地 加持曼荼羅・四印 (光明諸事業)</p>
<p>&lt;供養親近次第&gt; 集会</p> <p>供養 入法界觀 撥遣</p>	<p>&lt;供養親近次第&gt; 集会・開門・化作曼荼羅</p> <p>四印 灌頂 供養・執金剛阿闍梨偈</p>	<p>&lt;供養親近次第&gt; 集会・開門・化作曼荼羅</p> <p>四印 灌頂 供養・執金剛阿闍梨偈</p>

(4)(5)(6)は印・マントラ・曼荼羅から見て, *Sarvadurgatipariśodhanatejorājāsya tathāgatasya arhato samyaksambuddhasya kalpa* (以下DP) 系儀軌である。だがSTの觀想体系の諸要素も採用している。詳細は表中各注記を参照。

「初瑜伽三摩地 (*ādīyogo nāma samādhiḥ*, dañ poḥi sbyor ba shes bya baḥi tiñ ñe ḥdsin)」・「曼荼羅王最勝三摩地 (*maṇḍalarājāgrī nāma samādhiḥ*, dkyil ḥkhor rgyal mchog gi tiñ ñe ḥdsin)」・「羯磨王最勝三摩地 (*karmarājāgrī nāma samādhiḥ*, las kyi rgyal mchog shes bya baḥi tiñ ñe ḥdsin)」から成る、阿闍梨が修習すべき<sup>27)</sup>「三三摩地」と「供養親近次第」とでも呼ぶべき修習より上記の成就法儀軌は構成されている。以下の節ではこの意味を次第の順を追って考察したい。

## II. 「三三摩地」を含む曼荼羅成就法儀軌の構成論

「初瑜伽三摩地」は、上記の構成比較表およびそれに関する注記にも記したように、上記どの成就法も「護輪」・加行・本尊性の生起をその内容とする。ここで最終的に生起される本尊の名は(1)(2)では毘盧遮那、(3)では般若波羅蜜多、(4)では毘盧遮那、(5)では釈迦獅子、(6)では普明とされているが、これらは身体が装飾で満たされた色身としての如来たちであり、(1)(2)のモデルでありかつ(3)(4)(5)(6)もその構成体系をĀnandagarbhaが多く依拠させているSTに関するĀnandagarbhaに帰せられる注釈 (*vyākhyā*) (以下STV) には<sup>28)</sup>、それらの因 (rgyu) としての法身大毘盧遮那如来が述べられており、これは本尊生起の瑜伽で各色身を成就する際に名灌頂で遍入される。よってこの本尊性とは大毘盧遮那如来のことであると考えられる。今STVの大毘盧遮那如来に関する定義の箇所を引用すれば、

無二なるものとしての心と心所であり、(色身としての) 毘盧遮那そして金剛薩埵等の理趣を生じる因であり、法界の無始の相を有するものが大毘盧遮那である。それは無分別の大慈悲の自性である法無我の智慧の力により、徳分に応じて有情を完全に熟するために、一切時において毘盧遮那等の身体をとって (=行者が観想できるように可視的な色身をとって) 住するので、「虚空界の如くに常住して」等々と (STに) 説くのである。(D.31a<sup>4-6</sup>, P.36a<sup>5-8</sup>.)

(引用中括弧内は筆者の補足、かぎ括弧内はSTの本文)

となっている。それは「無二なるものとしての心・心所 (つまり大毘盧遮那は心とは別に客観物としてあるのではない)」とされるので、その獲得の方法は、名灌頂を含み「心を観察すること」と定義される<sup>32)</sup>「五相成身観」である。この心と無別であり無始法界相であり (故に始覚ではない) 智慧・慈悲の自性としての本尊性を獲得することを観想するので、この三摩地は本尊性の自身円満に重点があると考えられる。そして (以下で明らかにするが) その後この本尊性に基ついて以下の二つの三摩地が順々に展開されるので、この三摩地名の「初瑜伽 (*ādīyoga*)」とは根本の出発点としての瑜伽の意味であろう。

次に「曼荼羅王最勝三摩地」について考察したい。法無我の智慧によって有情利益のために色身を展開するという上の引用からも理解できるように、大毘盧遮那如来を獲得すると智慧と結び付いている慈悲心を発動することになる。STVは、

(本尊性を獲得して得た法身の智慧の一つの現われである)「一切如来の普眼である観自在 (法智)」とは、無量光の諸法と毘盧遮那等を示す曼荼羅に入ること等におい

て決定したことに他ならない智慧である。(D.45a<sup>5</sup>, P.52b<sup>2</sup>.)

(引用中括弧内は筆者の補足, かぎ括弧内はSTの本文)

と記述し, そして曼荼羅について,

欲界において曼荼羅等を化作し描くことによって有情利益をなして (D.45a<sup>6</sup>,  
P.52b<sup>3-4</sup>.)

と述べており, また, 曼荼羅を構成する諸尊の色身の因は大毘盧遮那如来に他ならないということと, (後にも述べるが) 密教では曼荼羅は阿闍梨が儀礼の中で弟子や信者に種々利益を授けることができる場であるということをも考え合わせれば, 詳細な曼荼羅を生起することは, 本尊性の獲得に本質的に連続する形で密教流の利他行為の場を生起することであると見えよう. この三摩地は「初瑜伽三摩地」によって獲得した本尊性に基づく利他行為の場を生起するための三摩地であると考えられる. その生起の方法は各色身の理趣 (これは後述の功德事業とほぼ同内容である) を思念しながら曼荼羅を生起するというものである. このような曼荼羅を生起するのでこの三摩地名は「曼荼羅 (maṇḍala)」とされているのだろう. これは自利の修習から利他心の修習に転じることを意味していると考えられる.

次に「羯磨王最勝三摩地」について考察したい. STVによれば, この三摩地は化作した曼荼羅を加持するための段であり<sup>29)</sup>, つまり曼荼羅という慈悲行為の場を加持することが目的であると考えられる. 上掲成就法儀軌(3)(5)(6)には

(以下の) これらの (瑜伽としての) 行為によって, 一切有情が三種菩提を獲得するので, 羯磨王最勝三摩地なのである. ((3);D.249b<sup>6-7</sup>, P.266b<sup>4</sup>.)

一切 (生類) が曼荼羅に入り一切悪趣から出離すること (を観想すること) は, 羯磨王最勝と言われるべきである. ((5);D.191b<sup>4</sup>, P.207a<sup>6</sup>.)

次に羯磨王最勝とは, 秘密讚の光明で生類を苦より救うために ((6);D.118a<sup>3-4</sup>, P.139b<sup>8</sup>.)

(以上, 引用中括弧内は筆者の補足)

という「有情救済のためである」旨が記され, また(1)(4)ではこの三摩地の際に曼荼羅の諸尊の功德事業を明記して行者にそれらを強く念ずることを規定している<sup>30)</sup>ので, 加持の意味は, 慈悲行為の場としての曼荼羅の意味を行者の意識の中で堅固にすること, 即ち慈悲心を堅固にすることであると考えられる. これに加えてこの三摩地のもう一つの目的としてSTVは「一切平等観」も同時に修習されることを説く<sup>31)</sup>. この三摩地の観想内容は, 一切世界の種々功德事業を有する諸尊を行者および行者と無二の曼荼羅と一体化させる (表中「智薩 遍入」)((1)(2)(3)), あるいは一切世間の有情たちを行者自身が発する光明で引き寄せて行者と一体化させて行者共々清浄になる (表中「光明諸事業」)((4)(5)(6)) というものになっているので, 確かに「一切平等観」も同時に修習する工夫がなされていると言える. そもそも完全な無分別の慈悲心は一切無分別心と同時に達成され得るものであり, Ānandagarbha 自身も (先の大毘盧遮那の引用より)「無分別の大慈悲の自性である法無我の智慧」と述べているので, この三摩地は双方修習の工夫がなされていると考えられる. いわゆる『毘盧遮那三摩地法』『心軌』『二卷本』といった金剛智や不空が訳した瑜

伽タントラに関する諸漢訳儀軌にはこの三摩地に相当する段が特に設けられておらず<sup>32)</sup>、また、上掲儀軌(2)のモデルとなったST降三世品にはこの三摩地に相当する箇所は説かれていないにもかかわらず(1)と同内容のこの三摩地を(2)作成の際に敢えて採用していることから理解できるように、本尊性と曼荼羅を生起した後に更にその本質である慈悲心(とそれに不可欠な)一切平等観を深める機会を与えるためにこの三摩地を設けることをĀnandagarbhaは考えていたようである。この三摩地名の「羯磨(karma)」とは曼荼羅を加持する行為のことを指し、ここでの加持とは行者の意識のレベルでは曼荼羅の本質に関する認識を堅固にすることであると考えられる。

以上の「三三摩地」には、自利を修習した後にそれが利他心に転じてそれを堅固にすべきであるという構造が見られる。このような「三三摩地」の解釈学を通してĀnandagarbhaは曼荼羅という密教流の実践活動の場を介しての阿闍梨の大乗的修習のあり方を表現したのだと考えられる。そしてこのような思想を取って三段階に分類したことは、それぞれの修習の持つ上述の意味を行者に明確に示すことを可能にし、またそれは同時に、Ānandagarbha自身あるいは彼の教えを受けた者がこのような成就法の思想に基づいて成就法儀軌を作成する際に、例えば(2)のようにもし依拠するタントラにどれかの三摩地の根拠がない場合にもその三摩地を補えるような便宜にもなっていたと考えられる。

「三三摩地」の修習が終了したら、次に「供養親近次第」とでも呼ぶべき修習が説かれる。Ānandagarbhaは諸尊の招請(表中「集会」・諸「供養」・「入法界観」)を修するこの次第の意味を特に詳説してはいないが、諸尊の招請から始まるこの次第の全課程が終了した後に諸尊を仏国土へ「撥遣」する際に唱えるマントラの内容がどの儀軌も「諸尊は利益をなして成就を与えた」という旨<sup>33)</sup>であること、また、6世紀頃以来諸尊を供養壇に招請し供養することによって修行促進等の功德を得られると信じられていた供養法儀礼の次第が多く作成され流行していた事実があった<sup>34)</sup>ことからして、この次第の意味は諸尊を曼荼羅に招請して供養して一体化しつつその加持力を受けることだと考えられる。ではなぜ「三三摩地」の後に敢えて諸尊の加持力を受ける機会を設けたのかというと、「三三摩地」によって獲得した三摩地の状態(うまく瑜伽できたとしても)「一時的な円満」の状態であり、瞑想を終了した後にもそのままの状態でも永続する「真の円満」ではなかったからであると考えられる。なぜなら、「三三摩地」でなされる「毎日四時(あるいは六時)修習」<sup>35)</sup>という規定は、一度の修習では「真の円満」は獲得できないので毎日四時修習してそれに近づかねばならないということを意味していると考えられるからである。故にこの「供養親近次第」で諸尊の加持力を被って「本当の円満」へと向かう修行促進という功德を期待したのだと考えられる。

以上分析してきた曼荼羅成就法儀軌は「前以って親近することに関する儀軌(sñon du bsñen bahi cho ga)」という定義がなされる<sup>36)</sup>。ここで「前」とは何の前かということ、各儀軌では(本稿では詳細には扱わないが)続いて「このように(前親近儀軌で)親近してから」等で始まって、作壇法や(観想で化作したものではなく)具体的に描かれた図繪曼荼羅を用いる灌頂儀礼やあるいは護摩儀礼等が説かれるので、「前」とは具体的な曼荼羅儀

礼を行う前という意味と考えられる。そして「三三摩地」の意義から考えれば「親近する」とは曼荼羅を構成する諸尊の本質に接近する・理解するという意味と考えられる。従ってその定義は、「(具体的な曼荼羅儀軌を修習する際に) 前以って (曼荼羅の諸尊に) 親近する (=それらの本質を理解する) ことに関する儀軌」という意味であると言える。灌頂等の具体的な曼荼羅儀軌では、(化作したものではなく描かれた) 具体的な曼荼羅を使用することによって、阿闍梨は弟子や信者たちに様々なレベルの種々利益を与えることができる。具体的な曼荼羅儀軌で使われる具体的な曼荼羅を十分使いこなすには、やはりその本質を理解していなくては適わぬものであると考えられる。なぜなら、具体的な曼荼羅とは誰が使っても絶大な威力を発する「世にも不思議な魔法の美術」なのではなく、大毘盧遮那如来という曼荼羅の本質が (先に述べたように) 阿闍梨の心と無二のものであり、その威力は阿闍梨の通達の度合に左右されると思われるからである。曼荼羅の本質を理解する曼荼羅成就法儀軌は、阿闍梨が具体的な曼荼羅儀軌を通して具体的な利他行を確実にを行うための欠かせない前行修習としての重要な側面を持っていることが理解できる。そうだとするとĀnandagarbhaの考えとしては、曼荼羅成就法儀軌の意味はそれのみ単独でとらえるべきではなく、実際の利他活動をする具体的な曼荼羅儀軌をも含めた全体的な密教儀礼体系の中でとらえるべきものであると言える。

以上の本稿の曼荼羅成就法論の分析結果を簡潔に図式化すれば、

(曼荼羅成就法儀軌) = 曼荼羅をうまく使える資質の獲得		→ (具体的な曼荼羅儀軌)	
「三三摩地」		→ 「供養親近次第」	
自身円満の修習	→ 慈悲行為の場の生起 ↓ 無分別の慈悲心堅固	→ 諸尊の加持	→ 実際の慈悲行為
< 自利円満 >	→ < 利他円満 >		

となる。阿闍梨は曼荼羅成就法儀軌という瑜伽によって自身円満 (そこから転じて) 利他心修習をする。しかし瑜伽の中で無分別の慈悲心を養っているだけでは実際の衆生救済をしたことにならない。諸尊の加持力に助けられつつ瑜伽の中で理解した曼荼羅の本質に関する認識を携えて、具体的な曼荼羅を使用する実際の利他活動を行う。このような瑜伽中の自利修習→瑜伽中の利他心修習→実際の利他行>という阿闍梨のあるべき大乘的实践生活のあり方をĀnandagarbhaは考えていて、「三三摩地」を含む曼荼羅成就法儀軌をその実践生活の体系の中に位置付け、実際の具体的な利他行に欠かせない前行としてのその瑜伽の意義を与えていたのではないかと考えられる。Ānandagarbhaが著作の至る所で修行者の理想を大乘としている点<sup>37)</sup>が確かに彼の儀礼体系の構成に色濃く現われている。

### III. 結論

Ānandagarbhaの研究に限らず従来の曼荼羅成就法の分析 (記述を目的とした分析は別として) では専ら、瑜伽の中で「本尊性を獲得すること」「曼荼羅との一体化」「行者の身

体のマイクロコスモスと曼荼羅に象徴化されるマクロコスモスの一致」といった観念論的な分析に終わっており、その分析では密教が重視する瑜伽の修習で得られるものは実際の利他行とどのような有機的な関係があるのかという疑問に対して十分な解答を与えることができないであろう。むしろそれらに有機的な関連が本当でないのならこの疑問は意味がないのであるが、Ānandagarbhaに関しては確かに有機的な関連を想定している。

彼にとって成就法儀軌は、実際の利他行を行う場である具体的な曼荼羅をうまく使いこなせるような資質を得るための方法論である。従って、成就法儀軌が成就する対象は（記述的な説明ならば「曼荼羅」であるが）本質的な説明をするならば、「実際の利他行を志向しそれを円満することができるための資質」と言える。（繰り返しになるが）具体的な曼荼羅とは誰でも使いこなせる「世にも不思議な魔法の美術」ではなく阿闍梨の心と無別であるので、それは阿闍梨の通達の度合によって利他行の効果を変化させる。故に成就法儀軌の内容は、諸尊の加持力に助けられつつの曼荼羅と無二の心に関する修習となる。内省としての瑜伽の意義はここに結実する。心に関する本質を追求するのはまさしく「三三摩地」を含む曼荼羅成就法儀軌という瑜伽の中だからである。心の本質は大毘盧遮那如来という本質である。「初瑜伽三摩地」ではその本質を自身円満することを目指す。それは最終的に実際の利他行に転ずるための根源的な出発点である。Ānandagarbhaにとって、阿闍梨は瑜伽の中で自己満喫するのみであるべきではなく実際の利他行をうまく行じることまでしなくては彼の理想としての大乗が実現しない。故に、「初瑜伽三摩地」から実際の利他行の場である曼荼羅およびその意義の観想を通しての慈悲心の発露（「曼荼羅王最勝三摩地」・堅固（「羯磨王最勝三摩地」）の修習として残りの三摩地が展開し、諸尊の加持を受けつつ曼荼羅をうまく使いこなせる資質となる（即ち「成就」）よう瑜伽することを規定するのである。

<略号及び使用テキスト>

- D チベット大蔵経デルゲ版（東北目録）  
P チベット大蔵経北京版（大谷目録）  
T 大正新脩大蔵経
- (1) Ānandagarbha : *Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikāsarvavajrodaya*, Skt: ed. 密教聖典研究会：「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-Sarvavajrodaya – 梵文テキストと和訳 - 」, 『大正大総合仏教研究所年報』8・9, 1986年・1987年, D.No,2516/P.No,3339.
- (2) Ānandagarbha : *Śrītrāilokyavijayamaṇḍalopāyikāryatattvasaṃgrahatantrōddhṛtā*, D.No,2519/P.No,3342.
- (3) Ānandagarbha : *Prajñāpāramitāmaṇḍalopāyikā*, D.No,2644/P.No,3468.
- (4) Ānandagarbha : *Śrīsarvadurgatipariśodhanamaṇḍalopāyikākṛpāvali*, D.No,2631/P.No,3458.
- (5) Ānandagarbha : *Sarvadurgatipariśodhanamaṇḍalavidhi*, D.No,2635/P.No,3460.



- (6) Ānandagarbha : *Śarvadurgatipariśodhanamahāmaṇḍalasādhanopāyikā*, D.No, 2630/P.No,3457.
- DP *Sarvadurgatipariśodhanatejorājāsya tathāgatasya arhato samyaksambuddhasya kalpa*, D.No,483/P.No,116.
- DPT Ānandagarbha : *Sarvadurgatipariśodhanatejorājatathāgatārhatasamyaksambuddhanāma kalpaṭikā*, D.No,2628/P.No,3455.
- ST *Sarvatathāgatattvasaṃgrahanāmamahāyānasūtra*, Skt: ed. 堀内寛仁 : 『梵・藏・漢対照 初会金剛頂経の研究 梵文校訂篇』上・下, 1983年・1984年, 高野山大学密教文化研究所.
- STV Ānandagarbha : *Sarvatathāgatattvasaṃgrahamahāyānābhisamayānāmatantra-tattvālokaakarīnāmavyākhyā*, D.No,2510/P.No,3333.
- 『心軌』 『金剛頂蓮華部心念誦儀軌』, T.vol,18, No,873.
- 『二卷本』 『金剛頂一切如来真実撰大乘現証大教王経』, T.vol,18, No,874.
- 『毘盧遮那三摩地法』 『金剛頂経瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』, T.vol,18, No,876.
- 『略出経』 『金剛頂瑜伽中略出念誦経』, T.vol,18, No,865.
- 『觀佛三昧海経』, T.vol,15, No,643.
- 『離垢慧菩薩所問禮佛法経』, T.vol,14, No,487.

(注記)

- 1) 先行研究は, *Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikāsarvavajrodāya* に関する梵本校訂研究及び和訳と, 瑜伽階梯の重要なタントラの思想解明のために彼の注釈書を補助手段として用いた研究が多く, そしてそこに留る. だが彼の灌頂論に関する研究 (桜井[1990]) もある.
- 2) 繁雑を防ぐために, 複数の成就法儀軌に共通して見られる項目に関しては, 比較表で最も左側に登場する成就法その項目の箇所注記に一括してまとめた. なお, (1)のみ (「初瑜伽三摩地」以外の箇所だが) 梵本が発見されている.
- 3) (1)§2-88, D.1b<sup>4</sup>-23a<sup>4</sup>, P.2a<sup>4</sup>-27a<sup>5</sup>.
- 4) (1)D.1b<sup>4</sup>-16b<sup>6</sup>, P.2a<sup>4</sup>-20a<sup>1</sup>, 高橋 [1988], (2)D.67b<sup>1</sup>-77b<sup>7</sup>, P.76a<sup>6</sup>-88a<sup>1</sup>, (3)D. 247a<sup>5</sup>-248a<sup>2</sup>, P.263b<sup>3</sup>-264b<sup>1</sup> (DとP共にsbyor pa mchog gi tiñ ñe ḥdsin 「最勝瑜伽三摩地」となっている), (4)D.125a<sup>1</sup>-134b<sup>4</sup>, P.148a<sup>1</sup>-159a<sup>5</sup>, (5)D.187a<sup>5</sup>-188b<sup>5</sup>, P.201b<sup>7</sup>-203b<sup>4</sup>, (6)D.112b<sup>4</sup>-116b<sup>2</sup>, P.133a<sup>5</sup>-138a<sup>1</sup>. 「初瑜伽三摩地」がどこから始まるのかは議論の分かれるところだが, 各儀軌書の体裁はあくまで表のようになっており, またĀnandagarbhaはDPのṭikā (D.No,2628/P.No,3455, 以下DPT) で「初瑜伽三摩地」の説明をする箇所ので「供養・禁戒 (「菩提心戒」)・「加持護念」等を含めて「初瑜伽三摩地」としているので (D.67a<sup>4</sup>-69a<sup>6</sup>, P.77a<sup>5</sup>-79b<sup>7</sup>.) 表のようにした. 彼に掃されるSTのvyākhyā (以下STV) (D.No,2510/P.No,3333) がこれらを含めないのは, それが逐語的注釈をしたところのSTの構成によるものであるとも考えられる.

この三摩地中の「薩埵加持」「四印」「灌頂」は「大瑜伽 (mahāyoga, rnal ḥbyor chen po)」と呼ばれ ((1):§27. (2):D.74b<sup>7</sup>, P.84b<sup>2</sup>, 等. (4):D.130a<sup>3</sup>, P.153b<sup>7</sup>, 等.), 「また,

曼荼羅を観想できない者は、大瑜伽を行って、一切のマントラを各々十万回唱えるべきである。(1)§27)とも定義されており、自身に本尊性を生起して曼荼羅を観想する前に行われるワンランク易しい加行であると考えられる。なお、ここでの「灌頂」は実際の灌頂儀礼ではなくて、瑜伽としての灌頂であると考えられる。詳しくは注記10)を参照。

なお、この三摩地全体に関して、(3)は「器界観」以前の各々の項目の印・マントラ・観想の詳細は省略され、ただ項目を羅列するのみである。(5)(6)は本尊生起の瑜伽の方法の詳細は略している。しかしDPTを見ると、これらの本尊生起の方法にはSTが説く「五相成身観」が用いられていたようである(D.14b<sup>7</sup>-17b<sup>5</sup>/67a<sup>4</sup>-69a<sup>6</sup>, P.16b<sup>6</sup>-18b<sup>7</sup>/77a<sup>5</sup>-79b<sup>7</sup>)。また、(1)(2)(3)(4)は「護輪」・加行・「五相成身観」・「加持現証(=大毘盧遮那如来遍入)」という構成で全体的によく類似し、(5)(6)は「護輪」・加行・「五相成身観」・「光明諸事業」という構成で類似している。大毘盧遮那如来遍入はSTの、「光明諸事業」はDPの重要なモチーフである。これらについては注記26)参照。

なお、「五相成身観」はチベット訳では皆、*mñon par byañ chub (rnam pa) lña* となっており(*rnam pa*はあつたりなかつたりする)、「五相現等覚」と訳すべきだが、理解の便宜のために本稿では伝統的な名称である「五相成身観」と一応した。なお、梵本が存在する(1)はこの「五相成身観」が説かれる箇所の梵本が欠けている。

- 5) (1)は護輪として、(外)内を浄化することと舌と手掌の加持・忿怒ティリシティリ・金剛ティリシティリ・被鎧・金剛火炎・金剛眼・金剛畏怖眼・金剛葉叉・金剛頂鬘・金剛索・金剛幢・金剛カーリー・金剛頂・金剛業・金剛網のマントラを説く。(3),(5),(6)は各項目については細かく具体的には説かずに「一切の護輪」等と簡潔である。また(4)には手掌加持・金剛カーリー・金剛頂・金剛業・金剛網のマントラは説かれずに代わりに足加持・金剛地・金剛牆・金剛帳房のマントラが説かれる。(2)は多少異なり、舌・手掌の加持・忿怒ティリシティリ・金剛ティリシティリ・被鎧・甘露軍荼梨・金剛夜叉・金剛頂のマントラ及び四「hūm」字を説く。
- 6) ここでは金剛輪の印・マントラを修習する。
- 7) 「二十種供養」としながらも二十種も説かない。(1)は華・焼香・燈・塗香・宝・戯嬉・劫樹・四無量心・嬉・鬘・歌・舞・華・焼香(なお、以上の嬉から焼香までのマントラには各々布施、戒、忍、精進、禪定、般若波羅蜜多という用語が登場し、これらはSTの *vyākhyā* (D.99b<sup>7</sup>-100a<sup>1</sup>, P.113a<sup>7</sup>-113a<sup>8</sup>) でĀnandagarbhaが以上それぞれの名を持つ女性の菩薩にそれぞれの理趣として仮託したものに一致している)・身・語・心・秘密の十九種を挙げ、(2)はこれから四無量心を除いた十八種を説く。(3)は単に「二十種供養で供養すべし」として項目の詳細を省いている。(4)も同様に項目の詳細は説かない。なお、「二十種」の数の問題については、(1)と『略出経』の比較を通して明らかにした高橋[1981]を参照。
- 8) (1)・(2)・(4)とも内容がよく一致する。(5)・(6)は戒の内容は略している。内容については高橋[1988]§23を参照。
- 9) (1); 金剛界大曼荼羅の諸尊の四印を説く。(2); 五仏, 四「hūm」。(3); 「自己を薩

であると観察してから」(=薩埵加持)に続いて単に「加持すべし。」とあるのみであり、「四印」のことを指す可能性もあるが、その内容は不明である。(4); 普明曼荼羅の諸尊の四印, 仏眼・白衣・摩摩枳・多羅を四処加持に当てる。

- 10) この灌頂は実際の灌頂儀礼ではなく、自分が灌頂を受けている様子を観想する瑜伽としての灌頂であると考えられる。いわゆる『略出経』(T.238a-239a)『心軌』(T.302c-303a)『二卷本』(T.314b-314c)『毘盧遮那三摩地法』(T.329b-329c)といった漢訳儀軌もこのような瑜伽としての灌頂を説く。(1)は結縁灌頂・水・宝冠・繪綵・金剛杵・名灌頂を,(2)は宝冠・光環(護輪の際にも用いる金剛ティリンティリのマントラを用いる)・繪綵・金剛杵・名灌頂と,大瑜伽の際の結縁灌頂・水・宝冠・鬘・金剛杵・尊主・名灌頂を,(4)は「初瑜伽三摩地」で結縁灌頂・水・宝冠・繪綵を,「曼荼羅王最勝三摩地」で水・宝冠・繪綵・金剛杵・尊主・名灌頂を説いている。なお,(5)と(6)は「水灌頂など」として残りを略している。(3)は灌頂の項目自体を説かない。
- 11) (1); サンスクリット語を音写した金剛歌(cf. ST§314), 及び嬉等の八供養を説く。(2); 四供養のみを説く。ここでは大瑜伽後に自身の金剛性を増長した後に行う「供養自己」と定義されている。
- 12) (1); 高橋[1988]§55-59, 「金剛杵の擁立」「金剛鈴の意味」「三昧耶の意味」「三三昧耶歌供養(なお, 高橋は「金剛薩埵の讚」としている)」と名付けられているものを指す。(2); 「金剛杵の意味」「金剛鈴の意味」「三昧耶の意味」に相当。だが, 「忿怒」「金剛火の如く燃え上がる者」といった性質を金剛薩埵に付加し, 降三世品流にアレンジしている。(3); 「金剛杵の擁立」「金剛鈴の意味」「三三昧耶歌供養」に相当。尊名を般若波羅蜜多と変えているが, 文章が(1)によく一致する。なお, これらは「初瑜伽三摩地」の箇所には説かれずに, 「羯磨王最勝三摩地」の後の供養親近次第の箇所に説かれる。
- 13) (1)§68-73, (2)D.77b<sup>7</sup>-81b<sup>4</sup>, P.88a<sup>1</sup>-93a<sup>7</sup>, (3)D.248a<sup>2</sup>-249b<sup>6</sup>, P.264b<sup>1</sup>-266b<sup>3</sup>, (4)D.134b<sup>4</sup>-138a<sup>3</sup>, P.159a<sup>5</sup>-163a<sup>8</sup>, (5)D.188b<sup>5</sup>-191b<sup>5</sup>, P.203b<sup>4</sup>-207a<sup>6</sup>, (6)D.116b<sup>2</sup>-118a<sup>3</sup>, P.138a<sup>1</sup>-139b<sup>8</sup>.
- 14) (1)§74-75, (2)D.81b<sup>4</sup>-81b<sup>6</sup>, P.93a<sup>7</sup>-93b<sup>2</sup>, (3)D.249b<sup>6</sup>-250b<sup>2</sup>, P.266b<sup>4</sup>-267b<sup>1</sup>, (4)D.138a<sup>3</sup>-139a<sup>2</sup>, P.163a<sup>8</sup>-164b<sup>3</sup>, (5)D.191b<sup>4</sup>-193b<sup>4</sup>, P.207a<sup>6</sup>-209b<sup>8</sup>, (6)D.118a<sup>3</sup>-122a<sup>5</sup>, P.139b<sup>8</sup>-144b<sup>8</sup>.

なお, この三摩地全体に関して, (1)(2)(3)はST金剛界品金剛界大曼荼羅の章の「羯磨最勝王三摩地」相当箇所に基づいて構成されている。その内容はSTに特有の「智薩(=大毘盧遮那如来)遍入の観想」を中心とする。(2)は記述が簡潔で項目を羅列するのみである。(4)(5)(6)はDPに特有の「光明諸事業」を中心内容とする観想を説き互いに類似している。これらのモチーフについては注記26)を参照。

- 15) (1)と(4)はここで諸尊の功德事業を説く。その内容は, (1)は「一切諸仏を一つに摂め(五仏), 一切の部族に刻印し(四波羅蜜多), 菩提心を起こし(薩埵), 一切如来を鈎召し(王), 隨染し(愛), 歡喜せしめ(喜), 灌頂し(宝), 光明で照らし(光), 布施波羅蜜多を行じ(幢), 希有なる微笑に安住せしめ(笑), 極めて清浄なる三摩地を円満

し(法)、煩惱と随煩惱を断じ(利)、大曼荼羅に遍入し(因)、無戲論なる法性を行じ(語)、無尽無余の供養で一切如来を供養し(業)、他の教えに心を寄せる者たち及び煩惱・随煩惱等の恐れから守護し(護)、一切の守護により保護し(牙)、心口意を一つに縛した真如の拳で一切諸仏を円満し(拳)、布施・戒・忍・精進・般若・禪定・願・方便を円満し(八供養)、菩提心という鉤で大解脱の城に一切有情を鉤召し(鉤)、十波羅蜜多の行によって引入し(索)、他の教えに寄せる心を砕き(鎖)、自性清浄なる不生に入つて正法の城を守ることを行ずる(鈴)。」であり、(4)は、「一切有情に菩提心を生ぜしめ(薩埵)、如来の慈悲で召請し(王)、清浄心を具し(愛)、心清浄なさしめ(喜)、金剛大宝の灌頂をし(宝)、無明の暗闇を切り開き(光)、諸布施をし(幢)、希有なる微笑で真理と一体となり(笑)、清浄な三昧を円満にし(法)、一切煩惱を断ち切り(利)、一切魔を撲滅して救い(輪)、一切の唾者を話せるようにし(語)、一切如来に供養し(業)、一切の恐れから守護し(護)、一切の守護により保護し(牙)、心口意を平等一なる状態にし(拳)、形象より自由な空性と無相と無欲と無功用において行じ(四明妃)、布施・戒・忍・精進・禪定・般若・願・方便を円満にし(八供養)、大解脱の城に一切有情を鉤召し(鉤女)、十波羅蜜多の行に住し(索女)、良き乗り物(=大乘)の諸教説に心を寄せ(鎖女)、自性の光明をを清らかにしつつ不生になって無上なる菩提行を通して一切有情を守る(鈴女)。」である。(括弧内は相当する尊名、筆者が補った)。なお、見ての通り(4)には五仏の功德事業が抜けている。

- 16) どの儀軌も(一切)供養とするが、特に五供養(華・塗香・焼香・バリ(bali)・燈)・七供養(浄化供養具・華・塗香・焼香・劍・燈・闍伽水)・八供養・金剛歌・羯磨曼荼羅より十六供養の項目が挙げられている。だがそれらの印言を(八供養を除いて)完備しているのは(1)のみである。
- 17) 四礼をしてから諸マントラを唱え、あたかも一切諸尊によってそれらマントラが唱えられていると観想して自己と本尊・一切の平等性に安住する瑜伽のことを指す。諸漢訳儀軌ではこの箇所で行われる瑜伽を「法界体性三摩地」等としており、ここでは「入法界観」とした。(1)・(3)は「om vajrātmako ḥamḥ」「om svabhāvaśuddho ḥamḥ」「om sarvasamo ḥamḥ」を、(2)はここではマントラは出さないが「金剛の自性を有する者(rdo rje bdag ñid can)」「自性清浄(ran bshin gyi dag pa)」「無我平等性(bdag med paḥi mñam pa ñid)」の観想としているので上と同様のものであると考えられる。ただし「初瑜伽三摩地」の相当箇所前で二者のマントラを説いている。(4)は諸尊のマントラを当てる。
- 18) D.67b<sup>1</sup>-83a<sup>2</sup>, P.76a<sup>6</sup>-94b<sup>7</sup>.
- 19) D.247a<sup>5</sup>-253b<sup>6</sup>, P.263b<sup>3</sup>-270a<sup>7</sup>.
- 20) 般若波羅蜜多(Prajñāpāramitā, śes rab pha rol tu phyin pa)を中心として、賢劫十六尊等の菩薩たちをそれぞれ4体づつ付き従える十方仏が般若波羅蜜多を囲むという形態の曼荼羅。この曼荼羅に登場する十方仏は(東・南・西・北・南東・南西・北西・北東・上・下の順に)、宝生(dkon mchog ḥbyuñ gnas)・無憂(mya ñan med pa)・放宝光(rin chen gyi ḥod ḥphro ba)・最上勝者(rgyal ba dam pa)・最上三昧象(tin ḥdsin glañ po

dam pa)・最上蓮華 (pa d̄ma dam pa)・放光日輪 (ñe maḥi dkyil ḥkor snañ ba)・最上大仏傘 (sañs rgyas gdugs chen dam pa)・歡喜 (dgaḥ bar byed pa)・最上蓮華 (pa dma dam pa) である。第六仏と第十仏は同名で共に右手に蓮華を持ち左手は臍に置く姿とされるが、身体の色は前者が白色で後者が黄金色とされ異なっている。平川彰 [1992] 『インド仏教史 下巻』, 東京: 春秋社. (初版 1979年) 338 では十方仏を念ずることは (中期以降の) 密教には受け継がれなかったとされているが、この儀軌にはこのように十方仏の観想が説かれている。しかし、この曼荼羅が依拠したタントラは不明である。なお、中期以前の密教系經典で他に十方仏の観想を説くものは、『觀佛三昧海經』の善徳・栴檀徳・無量明・相徳・無憂徳・宝施・華徳・三乘行・廣衆徳・明徳 (T.694a-b), 『離垢慧菩薩所問禮佛法經』の阿闍・寶相・無量壽・妙鼓聲・因陀羅雞都幢王・寶遊歩・娑羅因陀羅王・無量幢王・智光・毘盧遮那 (T.699a-b) がある。これらは上記の十方仏とは (重なる仏も多少いるが) 基本的に異なる系列のものであると考えられる。

- 21) D.125a<sup>1</sup>-140a<sup>2</sup>, P.148a<sup>1</sup>-165b<sup>7</sup>.
- 22) D.187a<sup>5</sup>-194a<sup>3</sup>, P.201b<sup>7</sup>-210b<sup>1</sup>.
- 23) D.112b<sup>4</sup>-122b<sup>5</sup>, P.135a<sup>5</sup>-145a<sup>7</sup>.
- 24) (5)は五供養・八供養, 二十五供養を, (6)は五供養・八供養・十二供養を特に挙げる。二十五供養と十二供養の個々の内容は説かれず, 内容は不明である。
- 25) 自心中の曼荼羅と虚空曼荼羅を化作して, 虚空曼荼羅を自心の曼荼羅に遍入させる観想。(5)・(6)に共通している。
- 26) 自分の心臓の月輪に悪趣清浄根本マントラや諸尊の心真言を布置して, そこから発する光明の拡大・収斂によって一切悪趣を清めて有情たちを心臓の月輪に鉤召し灌頂を与えて清浄にする観想。ĀnandagarbhaはDPTの中でこの観想を「内心曼荼羅」の観想と呼び, DP全体の科段分けの際にも「三三摩地」と共に採用して重視しており, (4)(5)(6)といったDP系儀軌の重要なモチーフとなっている。これに対して(1)(2)(3)といったST系儀軌では, この「光明諸事業」の観想に相当する箇所には, STの重要なモチーフである「大毘盧遮那如来遍入」の観想を当てて対応させている。DP系でありながらST系の要素も持つ(4)は, STの要素が多く見られる「初瑜伽三摩地」に関しては「大毘盧遮那如来遍入」の観想を採用している。なおこの問題については, 拙稿「Ānandagarbhaの神秘体系」『印度学仏教学研究』44, 日本印度学仏教学会, (印刷中) を参照。
- 27) 成就法儀軌の文章中の主語がしばしば阿闍梨になっている。
- 28) 印・マントラ・曼荼羅・主要モチーフから見れば, (1)(2)(3)はST系で(4)(5)(6)はDP系で異なるのだが, Ānandagarbhaは「光明諸事業」というDPの個性を生かしつつそれをSTの体系で解釈しようという態度をDPTで随所に示している (これについては前掲拙稿を参照)。故に本稿では主にSTの注釈であるSTVの記述を中心に用いる。
- 29) D.100a<sup>5-6</sup>, P.113b<sup>6</sup>.
- 30) 諸尊の功德事業の内容については, 注記15)を参照。
- 31) 「なぜ毘盧遮那 (となった阿闍梨) の心臓に一切が遍入するのか」というと, 毘盧遮那と

は一切を撰するものと知られるからである。」(D.101b<sup>4-5</sup>, P.115a<sup>8</sup>.) といったように我即一切、自他無別の理趣を再認することを主張する。

- 32) これらの漢訳儀軌では、「曼荼羅王最勝三摩地」に相当する詳細な曼荼羅の生起が終了したら、次に「供養親近次第」に相当する修習に入る。
- 33) (1)「オーン あなた方は有情利益をなした。成就を与えて、随意に仏国土へ行かれなさい。再び来るために。」、(2)「オーン あなた方は一切の有情利益をなした。随意に成就を与えた。仏国土へ行かれなさい。再び来るために。」(チベット語訳されている)、(3)「オーン (利益が?) 生じた。一切有情に成就を与えて、随意に仏国土へ行かれなさい。再び来るために。」(音写)、(4)「オーン あなた方は一切の有情利益をなした。随意の成就を与えた。仏国土へ行ってから再びまた来ることを願う。」(チベット語訳されている)
- 34) 例えば『蘇悉地羯羅經』や『牟梨曼荼羅呪經』にはこのタイプの供養法あるいはこれをベースにした灌頂法が多くのご徳をもたらすものとして多く説かれている。また、いわゆる『大日經』巻七供養法は、供養法と自己定義しつつ瑜伽タントラ的な本尊の成就法も説いており、供養法と成就法儀軌の結び付きを語っている。曼荼羅に関する瑜伽の後に続いてこのような供養法を行うことは瑜伽タントラに関する諸漢訳儀軌にも共通して見られることであり、これは当時の一傾向であったと考えられる。なおこの問題についての詳細は、拙稿「聖者来臨と曼荼羅世界の獲得についての歴史的考察」『宗教学年報』XII, 東京大学宗教学宗教史学研究室, 1997.3. を参照。
- 35) (2);D.83a<sup>1</sup>, P.94b<sup>5</sup>-b<sup>6</sup>. (3);D.253b<sup>6</sup>, P.270a<sup>7</sup>.
- 36) (1); §89, D.23a<sup>4</sup>, P.27a<sup>6</sup>. (2);D.83a<sup>2</sup>, P.94b<sup>7</sup>. (3);D.253b<sup>6</sup>, P.270a<sup>7</sup>. (5);D.194a<sup>3</sup>, P.210b<sup>1</sup>. (6);D.122b<sup>5</sup>, P.145a<sup>7</sup>. なお、(4)では明確にこの用語で定義はされないが、次に阿闍梨が行う弟子の利益のための曼荼羅の事業が続いて説かれているので、(1)等と趣旨は同じであると考えられる。
- 37) 例えばSTVでSTの撰義として、因・果・勝義および般若・方便波羅蜜多と無二の「一切如来の十の眞実」を聞・思の二般若で撰受することを指して「大乘」とする(D.26b<sup>7</sup>-27b<sup>1</sup>, P.31b<sup>4</sup>-32a<sup>5</sup>) .DPTでもDPの撰義として同様のことが述べられている(D.8a<sup>7</sup>-b<sup>7</sup>, P.9b<sup>3</sup>-10a<sup>4</sup>) .

(参考文献)

- 桜井宗信 [1990] 「Ānandagarbhaの灌頂論」, 『智山学報』39, 15-44.
- 高橋尚夫 [1981] 「『略出經』と『ヴァジュローダヤ』 - 供養会について -」, 『勝又博士古稀記念論集』, 1981年, 東京: 春秋社, 457-472.
- [1988] 「金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現第一瑜伽三摩地 - 和訳 -」, 『密教文化』161, p.113-150
- [1988] 「金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現 - 余滴 -」, 『豊山学報』32, p.81-110.

1995. 9.29 稿

すぎき つねひこ 東京大学大学院博士課程

Ānandagarbha is an Indian priest of Tantric Buddhism of the Yoga class who was highly praised by Tibetan tantric masters (*ācāryas*). He composed six treatises concerned with a sort of *Maṇḍalasādhanoṣyikā* which mainly consists of three stages of contemplation (*trisamādhī; tiri nie ḥdsin gsum po*). His work and thought have not been studied yet to any great extent. The present author aims at clarifying his understanding of the meaning of practicing the *Maṇḍalasādhanoṣyikā* in the context of his whole system of tantric rituals, on the basis of an analysis of the contents of the *Maṇḍalasādhanoṣyikā* described in each of his works.

The *Maṇḍalasādhanoṣyikā* is a yogic method for the completion of a *maṇḍala* and is supposed to be practiced by a tantric master, according to Ānandagarbha. All of his six treatises agree that it consists of three stages of contemplation followed by "coming near while offering."

At the first stage of contemplation a tantric master observes the essence (*ran bshin*) of his mind (*sems*) for the purpose of acquiring the wisdom (*ye śes*) of the Supreme Lord "nam par snan mdsad chen po," who is Dharma Body (*chos kyi sku*), omnipresent, and ultimately not different from one's mind.

At the second stage of contemplation a tantric master forms a detailed image of the *maṇḍala* which comprises deities who are born from the Supreme Lord. The wisdom obtained through the practice of the first stage of contemplation is the essence of compassionate mind (*sññi rje*), so that the wisdom is followed by operating the compassionate mind. Therefore, the purpose of practicing this stage of contemplation is to promote a tantric master's compassionate mind on the basis of the wisdom gained through the practice of the first stage of contemplation.

At the third stage of contemplation a tantric master brings all forms of existence into unity with the *maṇḍala* while pondering on the contents of the *maṇḍala*'s deities' compassionate performances, in order to consolidate the *maṇḍala*. As the *maṇḍala* is a spatial incarnation of the Supreme Lord's compassionate mind based on his wisdom, the practice of this stage of contemplation proves to be for the sake of fixing the tantric master's compassionate mind based on his wisdom.

At a form of contemplation called "coming near while offering," a tantric master gives offerings symbolized as *mantra* and *mudrā* to the deities of the *maṇḍala*, who are called from Buddha Lands to the *maṇḍala*. Since a tantric master does not always complete his yoga in a one-time or few-times practices of the three stages of contemplation,

he expects the deities to help him complete it in return for his offerings. (This contemplation seems to have something to do with the popularity of offering rituals in those days: through the practice of those rituals one expected the effect of speeding up to enlightenment (*abhisambodhi*) as a present from the deities.)

Those are the contents of *Maṇḍalasādhanoṣyikā* by Ānandagarbha. He defines it as “the means for coming near beforehand (*sñori du bsñen bañi cho ga*).” Taking the *Maṇḍalasādhanoṣyikā*’s purpose into consideration, “coming near” seems to denote “coming near to the essence of the *maṇḍala*.” Moreover, since the *Maṇḍala* rituals such as tantric initiation (*abhiṣeka*), *homa* ritual, and so on are to be conducted after the practice of *Maṇḍalasādhanoṣyikā*, “beforehand” means nothing but “before *Maṇḍala* ritual.” When we accept this interpretation, it may safely be said that the *Maṇḍalasādhanoṣyikā* has some organizational relation to *Maṇḍala* ritual.

According to Ānandagarbha, the *Maṇḍalasādhanoṣyikā* is a self-reflective yoga, whereas the *Maṇḍala* ritual is a deed in which a tantric master can actually supply his disciples and believers with the profits of the religious or secular level by using a drawn *maṇḍala*. Since the essence of the *maṇḍala* is the Supreme Lord’s compassionate mind based on his wisdom, which is ultimately not different from a tantric master’s mind, the *maṇḍala* can not be properly utilized by everyone. Only a tantric master can use it well when he has fully contemplated his own mind.

In short, Ānandagarbha’s understanding of the meaning of practicing *Maṇḍalasādhanoṣyikā* is to acquire the ability of performing the tantric master’s compassionate deeds well in the following *Maṇḍala* ritual. This meaning, significantly located in Ānandagarbha’s whole system of tantric rituals, reflects his idea that the position of *mahāyāna* is an ideal of his Tantrism which is not realized unless the tantric master can actually perform compassionate deeds well.